

アメリカの大学におけるコメンズメントスピーチ (六)

ステイブ・ジョブズ

小笠原 はるの
遠藤 昌子

本稿では二〇〇五年にスタンフォード大学で行われたステイブ・ジョブズのコメンズメントスピーチをとりあげる。このスピーチは、若くして成功し、同時に挫折もし、復活を果たしたステイブ・ジョブズが死を意識した時期に将来を約束された若者たちに手向けたものである。人生観や世界観がにじみ出たジョブズのメッセージは世界中に深い感動を残した。ここでは、まずジョブズの生いたちについて紹介し、彼の思想が形づくられた過程を追う。次に彼のスピーチが生まれたいきさつとそのスピーチが社会でどのように受けとめられたかについて考察する。最後にスピーチの翻訳を試みることで、そのメッセージが表現するものを紹介したい。

一、ステイブ・ジョブズについて

はじめにコメンズメントスピーカーであるステイブ・ジョブズについて紹介する。ジョブズはアップルの創設者であり、アップルが株式を公開した時には巨万の富を得て二十五歳でフォーブズの長者番付に載り、二十七歳の

時にはタイム誌の表紙を飾った(写真1)。その後、三十歳でアップルから追放されたが、次世代のコンピュータを開発する会社ネクストを立ち上げ、次いでアニメーション制作会社ピクサーを買収しCEOとなった。のちに、業績が思わしくなくなっていたアップルに復帰し、その業績を劇的に改善させた。彼は二〇一一年に亡くなるまで、休むことなく新製品、新技術の開発を続け、IT業界の革命

児、天才的なビジョナリーなどと呼ばれ、その斬新なアイデアと行動力、作り出す製品の品質と美しさなどが非常に高く評価された。また、製品のプレゼンテーションは、熱情にあふれ感動的だった。人の心に残るジョブズのスピーチは広い関心を集め、そのカリスマ性で彼は今でも世界中に熱狂的な支持者を持っている。

こうした高い評価の一方、その人柄や言動などに多くの矛盾を抱えていた。例えば、社会的順応性に欠けている、他人への共感力を持ち合わせていない、極端に自己中心的である、熱狂的であり冷淡である、などである。このような性格のために彼と長い付き合いを持つのはごく少数で、親密にしてもやがて敵対関係になってしまう同僚、友人も多かった。その原因の一つとしてあげられたのは、彼の出生をめぐる複雑な事情であった。彼が養子であったことがこういった彼の性格や行動パターンに大きく影響したというのだ。もちろん、出生をめぐる事情だけで一個人を完全に説明できるものではない。しかし、彼を理解する物差しの一つとなろう。ジョブズに関しては様々な情報が得られるが、ここではウォルター・アイザックソンが出版した伝記『スティーブ・ジョブズ』をもとにみていきたい。^{*1}これは、アイザックソンがジョブズから直接依頼を受け、ジョブズの死の直前まで三年間に渡る取材のもとに書き上げたものである。まさにジョブズの遺書といえるであろう。

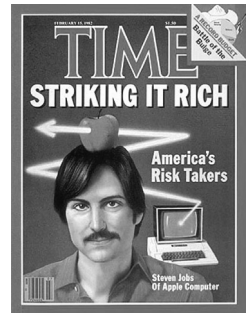


写真1 タイム誌の表紙を飾るジョブズ

一九八二年二月十五日(二〇一三年七月二十二日取得)

http://www.time.com/time/photogallery/0,29307,1977507_2098363,00.html

ジョブズは卒業スピーチの冒頭で、自分の出生の事情を語っている。未婚の大学院生を母として生まれ、生まれると同時に養子に出されたが、最初の養子予定先からは「女の子が欲しかったのに、男の子だから」という理由で断られ、急ぎょジョブズ夫妻の元に届けられ、数か月後に養子縁組が成立した。彼が養子であることは家庭でオープンに話されていたので、それを不思議とも思わずいたが、ある体験をしてから自分の出生が気になるようになった。彼が六、七歳の頃、近所の友達に自分は養子だと話したら、本当の両親はあなたのことがいらなかったのねという反応が返ってきたのだ。ジョブズは衝撃を受けた。

子供時代に、自分はいらない存在であるかもしれないという疑念を一度でも持つとなかなか拭えるものではない。自分の存在理由の不確かさは、恐ろしく、さびしく、しかもみじめに感じられるものであろう。ジョブズの友人たちは、彼が養子であったことが彼の行動や考え方に影響を及ぼしているとみる。友人の一人は、出生が自分ではコントロールできない状況であったがために、自分の力の及ぶことはコントロールしたいと考え、自分の生み出す製品は自分の延長だとして完璧であることを目指した、と語る。また、別の友人は、捨てられてつらかった、だから他人には頼らなくなったと彼が話すのを聞いたという。

ジョブズが二十三歳の時に彼のガールフレンドが女兒を出産した。当初、ジョブズは親子関係を否定したが、DNA鑑定で立証されたので血縁関係を認めた。父親が自分を捨てたのと同じ年齢でジョブズ自身も自分の子供を放棄しかけたのであった。そのガールフレンドは、ジョブズの内面には、養子に出されたことで「壊れたガラスがぎっしり」で、それが彼の行動に様々な影響を及ぼしている、子供のことも、彼自身が捨てられたから今度は捨てる側に回ったと語っている。

ジョブズ自身は世間のそのような評価は否定する。養子だから実の親に認められなくて一生懸命働いて成功しよ

うとしていくわけではないと語り、実父母のことを「僕を生んだ精子銀行と卵子銀行にすぎない」とすげなく呼び捨てた。しかし、実際には実の親探しを続けていたのだった。一九八〇年、まずは私立探偵を雇い調査をしたが、発見できず、次には自分の出生証明書にサインした医師に連絡をした。しばらくたって医師から母親の名前を知らされると、それをもとにさらに調査を進めて、自分の実母を探し当てた。彼の実母は、ジョアン・キャロル・シールという名で、ジョブズを生んだときは二十三歳の大学院生だった。相手は同年齢のシリア人で当時大学のテイーチングアシスタントをしていた。二人は結婚を決意したが、ジョアンの父親は、娘がイスラム系の外国人と結婚することには大反対だった。父親が病気で重篤な状態であったために、その反対を押し切った結婚もできず、小さなコミュニティでは中絶もできないことだった。そこでジョアンはサンフランシスコに行って出産し、その子を養子に出したのだった。

ジョブズの実父はアブダールファター・ジャンダリという名前で、裕福な地主の家庭に生まれ、シリアが政情不安定になった時期に渡米したのであった。^{*2} やがてジョアンの父親が亡くなると、ジョブズの実父母は結婚した。まもなくジョブズにとっては妹に当たる第二子が生まれたが、両親の関係が悪くなり、二人は結婚五年で離婚してしまった。その後、母親は娘を養育しながら生計を立てていたが、別の男性と再婚した。父親は、いったんアメリカで教職についた後、仕事を辞め母国シリアにもどっていた。このような状況で、実父母は養子に出した子供を探すことはなかった。そしてその後長い間、ジョブズの実父母は互いに連絡を取ることもなくいたのだった。

一九八六年に彼は初めて実母との対面を果たし、また実妹とも出会う。しかし、すでにアメリカに戻っていた実父には会おうとしなかった。アップルを解任された後でネクストやピクサーを始めた起伏の多い時期であった。一九九一年にジョブズはローリー・パウエルと結婚し、やがて三人の子供の父親となった。この時期になると、

ジョブズは安定した家庭生活を送り、実母や実妹とも交流し、二十三歳の時に捨てかけた実の娘とも良い関係になることが出来ていた(写真2、写真3)。

二〇〇〇年にはジョブズはアップルのCEOとして復帰し、同社の業績を改善することに成功した。翌年にはiPODの発売を始めた。二〇〇三年にはiTUNESを開始して、世界の音楽購入販売ルートを根本から変化させることになった。大きな新しい時代のうねりを自ら作り出していたのだ。しかしこの頃、予期しない事に癌が発見され、二〇〇四年、彼は膵臓癌の摘出手術を受けた。

手術後は再発と寛解で体調は好不調の波を繰り返していたが、彼の精力的な仕事ぶりは変わらずであった。二〇〇七年にはiPHONEを、二〇一〇年にはiPADを発売した。彼の作り出す製品によって、一般の人々はその掌に普通にパソコンを持ち、瞬時に情報を共有し、コミュニケーションでできる世界を体験できるようになった。世界の情報のあり方を永遠に変える業績を残し彼は二〇一一年十月に五十六歳で亡くなった。実父とは最後まで会うことはなかったが、家族と実妹に看取られて息を引き取った。

ジョブズは音楽が好きで、ジョニ・ミッチェルの「リトルグリーン」という曲を好んだという。それはミッチェルが自分の子供を養子に出したと



写真3 スティーブ・ジョブズの実父母
二〇一一年十月九日アルアラビア紙 HP (二〇一三年七月二十二日取得)
<http://www.alarabiya.net/articles/2011/10/09/170940.html>



写真2 スティーブ・ジョブズと妻 ローリーン
二〇一一年テレグラフ紙 (二〇一三年七月二十二日取得)
<http://www.telegraph.co.uk/technology/steve-jobs/8845276/Steve-Jobs-unwitting-father-boasted-about-meeting-the-Apple-boss.html>

きに歌ったものだ。「正式な書類にサインした。かなしくて悔しい、けれども恥とは思わない、小さなグリーンどうぞ幸せに」という歌詞だ。この歌詞と自分の人生を重ね合わせることもあったのだろう。しかし亡くなる少し前のインタビューでは、自分が養子に出されたことについては、あまり考えなくなるとジョブズは語っている。

人間は複雑な感情思考回路を持つ生物であり、一個の人間の人格を形成する要素は多々あろう。しかし、生育過程や親との関係はその人物を理解するうえでの大切な要素である。ここでは、彼が養子であった事に焦点を当てて、彼の人生の概略を紹介した。次には、ジョブズがスタンフォード大学でスピーチをしたいきさつとそのスピーチの影響についてみていく。

〔遠藤〕

二、スピーチが生まれる前・生まれた後

スピーチが生まれたいきさつ

アップル製品に関するプレゼンテーション以外でジョブズがスピーチをしたのはスタンフォード大学が初めてであった。ジョブズ自身はスタンフォード大学の卒業生ではない。しかし、同大学は妻ローリーの出身校であり、アップルと同じシリコンバレーにキャンパスを持つ。スピーカーの選択をまかされた卒業式実行委員会の学生が自らの運命を切り開いてきた経営者に白羽の矢を立てたのは自然な成り行きだったといえよう。

しかし、ジョブズがスピーチを引き受けることを承諾したのは、死と向き合う体験があったからこそではないだ

ろうか。前章で述べたとおり、スピーチの前年、二〇〇四年にジョブズは臓臓ガンを宣告され、死に直面していた。それまで自身について語ろうとしなかったジョブズが自分の人生を振り返り、そこから学んだことについて次世代を担う若者に伝えることに大きな意味があった。それは、自分の人生をありのまま受け止めることであり、受け止めたものを大切な人たちとわかちあうことでもあったのだ。

「人生の時間は限られている。他人の人生を生きることと時間を無駄にしてはいけない。」ジョブズのスピーチは世界的な反響を呼び、その動画は何百万回も再生されることになる。

日本でもスピーチの内容が数多くのメディアによって紹介された。活字になったものでは、『週刊アエラ』（二〇〇五年九月十九日号）の抄訳、『MAC POWER』（二〇〇九年第一号）の抄訳、日本経済新聞サイト（二〇〇一年十月九日）の全訳があり、『ステイブ・ジョブズに学ぶ英語プレゼンター聞き手の心をつかむストーリーと五十表現』、『ステイブ・ジョブズ伝説のスピーチ&プレゼン』といった英語教材でも題材にされている。インターネット上でもさまざまな翻訳が試みられ、ジョブズのスピーチに感銘を受けたコメントが今もなお飛び交っている。彼のスピーチの影響がはかりしれないものだったことがわかる。

ここでは、ジョブズのスピーチが社会的にどのような意味付けられたのかを考察する。その方法として、ジョブズのスピーチを卒業式で聞いた当時のスタンフォード大学卒業生が、実社会を体験したのち、彼らがスピーチをどのように受け止めたのかを探ることとする。

あの日ジョブズのスピーチを聴いて

ジョブズのスピーチから六年ほどが経過した二〇一二年一月七日にNHK・BSによる「ドキュメンタリーWE『ステイブ・ジョブズの子どもたち』ハングリーであれ 愚かであれ』」でこのスピーチを聞いた卒業生のその後を追った番組が放送された。^{*1}

ウォール・ストリートのデモで顕在化した若者たちのレイオフ、就職難、貧困、経済格差。番組が光を当てたのはグローバル化した経済によって閉塞したアメリカ社会だった。かつてジョブズからのメッセージを受け取った若者たち、名門スタンフォード大学卒のエリートとして約束されていたはずの若者たちの未来が打ち砕かれようとしていた。番組はジョブズがスタンフォード大学のスピーチで語った三つのストーリー「点と点をつなぐこと」、「愛することと失うこと」、「死について」で構成され、それぞれのテーマごとに卒業生のその後の生き方を紹介する。明るい未来を約束したようにみえた「アメリカンドリーム」がただのフィクションになってしまったとき、あの日、ジョブズのスピーチを聴いた卒業生は何を指針にして生きていたのだろうか。番組に登場する三人の卒業生の経験と彼らの言葉を追っていく。

点と点をつなぐこと

投資銀行に就職したある卒業生は、常に急かされる銀行員時代を「まさに他人の人生を生きているような感じだった」と語った。ある日鏡の中の自分を見て「今の自分は、本当にこれでいいのだろうか」と疑いの目で見るように

なる。漠然とした不安を抱え、ドラッグにさえ頼るようになっていった彼は、ジョブズのスピーチの動画を偶然見直して、「これは自分の仕事ではない」と気づく。彼は会社を辞め、企業と消費者を映像で結ぶマーケティングを行うコンピュータソフトの会社を立ち上げた。「自分の中のかを信じて動け。いつか点はつながる。僕には投資銀行が向いていないとわかった。それも一つの点になったんだ」彼はそう述べて、次の一步を踏み出していった。

人として生きていけば、点と点がつながる瞬間を幾度も体験することになる。さまざまな経験の中で、「これは自分の仕事だ」と思えることに全力で取り組むことができるようになる。しかし、経験がないときは「信じる」しかない。いつかは点がつながると信じて「自分が何をやるのか選択すること」しかできない。それが点となり将来につながっていく。「次に何が起きるかは誰にもわからないからね」と口にした卒業生は、ジョブズのメッセージを支えに自分を信じて行動していたのだった。

愛することと失うこと

ジョブズのスピーチから二年ほど経過した二〇〇八年、住宅バブルがはじけ、サブプライムローンが暴落、リーマン・ブラザーズが破綻した。当時、新聞社に勤めていた卒業生は記者として取材に明け暮れていたが、大量リストラによって職を失った。「一生懸命勉強して、働いて、頑張ればいい人生が送れると教えられた。でも全然違っじゃない。私は無力だった。」一流企業に勤めていたにも関わらず、再就職ができない。約束されていたはずのアメリカンドリームに裏切られたかのような体験。しかし、失ってみて、わかったことがあると卒業生はいう。それは「ジャーナリズムや書くことがたまらなく好きだ」ということ。そして、もがきながらも自身のウェブサイトでニュースリ

ンクを立ち上げた。収入はわずかでも地元の新ニュースを取材することに喜びを感じはじめたのだ。ゆるぎない心で自分と自分のしていることを愛し、信じることに、それが幸せにつながるのだと、ジョブズのスピーチを振り返った卒業生はその言葉を胸に新しい人生を送りはじめた。

死について

卒業後グーグル社に就職した卒業生は年収二〇〇万円近い高収入を得ていたにも関わらず、空しさを感じていた。一人残ったオフィスでジョブズのスピーチを見返した彼は、大切なものに気づいたという。「僕にとって大切だったのは、価値のある存在になることだった。そして、年老いていく両親のそばにいたいということも重要だった。娘に祖父母の愛情を与えることもね」

彼は、会社を辞め、故郷インドに戻り、海外旅行の情報を提供するリサーチ会社を立ち上げる。収益をあげ、その資金で母国に学校や施設を建設したいという。「社会に求められていることのために活動資金を集めたい。それが生きる意味だし、僕にとってのワールドドリームなんだ」一生懸命努力し、上を目指していればかなうはずのアメリカンドリームは存在しなかった。しかし、彼が代わりに手にしたのは、「自分が何のため、誰のために何をしたのか」という彼自身の「ドリーム」だった。

「他人の仕事をするな」というジョブズの言葉を、たんにこの仕事は自分に向いているのか、自分の力が活かされているのか、といったことではなく、世の中のため、人のために、自分は何ができるのだろうかという高い次元でのメッセージと受け取った卒業生は、他人の価値観に付き合って時間を浪費するのではなく、「何に向かっているの

か」かが大切なのだと語る。

スタンフォード大学を卒業した三人の卒業生は、就職して一年目から年収一千万円以上の所得を得、早々と「アメリカンドリーム」を実現していた。ジョブズも「アメリカンドリーム」の象徴のようにいわれるが、実際には、卒業生たちにそれが単なる「ドリーム」であったことを教え、「本当の幸せとは何か」という究極の問答の世界に彼らを引き込んでいったことがわかる。

卒業生で新しい人生を歩み始めた者に共通するのは、自分のしていることを愛せている時、「今、ここ」に幸せがあることを実感しているということ、他人の人生ではなく、自分の人生を見つけて、それに向かって歩き続けることが大切であるということ。ここで紹介した若者はほんの一握りであるが、困難な時代であるからこそ、ジョブズのスピーチの意味を噛み締めることができる世代でもある。出生や解任、そして癌と数々の困難を経験してきたジョブズ。先は見えなくとも「点と点はつながる」というその生き様と「自分が何をやるかを自分で選択すること」という人生への考え方が今こそアメリカの若者に求められるものとなったのだ。

同じように波乱の時代を生きる日本の若者たちにもこのスピーチを読んでほしいと思い、本稿では特に若い人たちに向けて翻訳を試みる。日本社会もグローバル政策の波に飲み込まれ、若者たちもまた同じように苦境に立たされている。今の時代を生き抜く若者たちにとって、何を目指すのであれ、このスピーチから学べることは多い。いくつか点がつながると信じて、立ちあがっていく。その勇氣と希望をこのスピーチから受け取ってほしい。

翻訳に使用したのはジョブズがあらかじめ用意したスピーチ原稿ではなく、実際に発話されたスピーチを書き起こしたものである。ジョブズの息づかいを感じ、彼のメッセージをより深く理解するためにも、その時、その場で

語られた言葉を翻訳することにする。

〔小笠原〕

三、ステイブ・ジョブズのコメンタメントスピーチ

(二〇〇五年六月十二日 スタンフォード大学にて (写真4、5、6))

点と点をつなぐこと

ステイブ・ジョブズ

翻訳 小笠原はるの・遠藤昌子

今日はこのような素晴らしい大学の卒業式に出席できて嬉しく思う。ぼくは大学を出ていないから、大学の卒業式に出席するのはこれが初めてだ。今日はぼくの人生から三つの話をしよう。それだけだ。どうってことない。たった三つだ。

最初の話は点と点をつなぐことについてだ。

ぼくはリード大学を半年で辞めた。その後一年半ほどは、大学の授業にもぐりこんでいたけどね。中退した理由を話そう。それはぼくが生まれる前にさかのぼる。

ぼくを生んだのは未婚の若い大学院生で、子どもが生まれたら、養子に出すことにしていた。養子先は大卒が条

件で、弁護士夫妻がもらってくれることになっていた。だが、生まれてみると男の子だった。夫妻は女の子を希望していたので、次の順番だった養父母に夜中に電話がいった。「男の子が生まれたんですが、この子をもらってくれませんか？」養父母は「いいですよ」と即答だった。その後、ぼくの生みの母は、養父母が大卒ではなく、養父に至っては高校も出ていないと知り、養子縁組を拒んだ。何ヶ月かして養父母がぼくを大学にいかせると約束したので、やっと承諾したのだ。

そして十七年後、ぼくは約東どおり大学にいかせてもらった。ただスタンフォードと同じくらい学費の高い大学をぼくは選んでしまった。コツコツ働いて貯めた両親のお金はすべて学費に消える。半年もすると、大学が無意味に思えた。人生で何をしたいのか、大学で勉強したらその答えがでるのか、わからなかった。それなのに、ぼくは両親のお金を使っている。ぼくは大学を辞めることにした。何があっても大丈夫だと信じることにした。とても不安だったけれど、今思うと、それまでの人生で一番よい決断だった。辞めても、キャンパスにとどまったぼくは、つまらない必修授業ではなく面白そうな授業にもぐりこんだ。

ただ、思うほど甘くはなかった。寮を追い出され、友だちの部屋に転がり込み、一本五セントのコラーの空瓶を集めてはお金にして、食べ物を買う。



写真6 スタンフォード大学
校舎

US ニュース大学格付けHP (二〇一三年七月二十二日取得)
<http://colleges.usnews.rankingsandreviews.com/best-colleges/stanford-university-1305>



写真5 ウォールストリート
ジャーナル紙 二〇一
一年

ジョブズ卒業スピーチ スタン
フォード大学 (二〇一三年七月
二十二日取得)
<http://online.wsj.com/article/SB10001424052970203388804576613572842080228.html>



写真4 スティーブ・ジョブズ
スタンフォード大
学卒業式にて

スタンフォード大学HP (二〇一
三年七月二十二日取得)
<http://news.stanford.edu/news/2005/june15/grad-061505.html>

日曜の夜にはクリシユナ寺院まで十キロ歩き、週に一度のまともな食事にありついた。そんなことがうれしかった。好奇心に突き動かされ、直感に従って暮らしていたこの頃の経験は、のちの人生で役に立った。たとえばこんなことだ。

その頃のリード大学はおそらく全米随一のカリグラフィの授業を行っていた。キャンパスのあらゆるポスターや書類棚のラベルがどれも美しい手書きだった。もう必修の授業を受ける必要はなかったので、その授業に出て、セリフとサンセリフの書体や文字と文字との最適な間隔について学んだ。美しい文字はどうやって生み出されているのがわかった。感性でしか説明のできない、繊細で美しい伝統に惹かれたのだった。

それがその後の人生で役立つとは思えなかった。でも、十年後、最初のマッキントッシュをデザインしているときに、カリグラフィで習ったことが蘇ってきた。だから、それをマックに組み込んで、美しく文字を表示できる最初のコンピュータが生まれた。もしぼくが大学を中退しなければ、あの授業で学ばなかっただろうし、さまざまな書体やバランスのよいフォントの間隔がマックに組み込まれることもなかったろう。そしてウィンドウズはマックを真似ただけなので、マックがなかったら、美しい書体を持つコンピュータがこの世に存在することにならなかっただろう。大学にいたときには、そのときやっていることが将来何につながるかわからなかった。ただの点だった。でも十年後振り返るとやっていたことがつながっていた。

点はその先何につながるかはみえない。振り返ってみて、はじめてつながりがみえる。だから将来何かの形で点がつながると信じていることだ。自分の感性、運命、人生、カルマなど何でもいいから信じているんだ。自分の心に従って生きる。たとえルールから外れようと、なんとかなると思えばいい。点はいつかはつながるから。そう思うだけで人生が違ってくる。

二番目の話は愛することと失うことについてだ。

ぼくは恵まれていた。まだ若いときに好きでたまらないことを見つけたから。二十歳のときぼくは実家の車庫でウォズといっしょにアップルを始めた(写真7、8)。ぼくたちは一生懸命に働いて、アップルは十年でたつた二人から四千人以上が働く二十億ドル企業になり、最高の創造物であるマッキントッシュを出すことができた。でもそのわずか一年後、三十歳になったとたん、ぼくは会社を首になってしまったのだ。どうしたら自分が作った会社を首になれるんだ？

それはアップルの成長にともない、会社経営に長けた人物を雇い入れたことから始まった。最初の年はうまくいったが、やがて経営のビジョンが食い違い始め、対立するようになってしまった。重役会はその人物を支持し、ぼくは三十歳で解雇されてしまう。世間からは失敗とみなされ、人生の中心だったものを失ったぼくは途方にくれた。

数ヶ月は何をすべきか全く分からなかった。先輩の起業家がぼくに託してくれたバトンを落としてしまったんだ。デービッド・バックカードとボブ・ノイスには期待に応えられなかったことを謝った。落伍者のレッテルを貼られ、シリコンバレーから逃げることにさえ考えた(写真9)。しかし、何かが心の中で湧き上がってきた。自分がしてきたことが、まだ好きだという気持ちだ。アップルから追放されても、その気持ちは変わらなかった。拒絶されても、



写真7 ジョブズとウォズニック
(アップル社創設のころ)

タイム誌 (二〇一三年七月二十二日取得)

http://www.time.com/time/photo-gallery/0,29307,1976921_2097550,0.html



写真8 ジョブズの実家

ストックマーケットニュース社 HP
(二〇一三年七月二十二日取得)
<http://www.cnbc.com/id/43479628/page/2>

まだコンピュータが好きだった。だから一からやり直そうと思った。そのときは分からなかったけれど、アップルを首になったことは自分にとって一番いいことだった。成功へのプレッシャーがなくなつて、ゼロから気楽に始めることができた。肩の力が抜けて、斬新なアイデアが生まれ始めた。

それからの五年間でぼくは、ネクストとピクサーという会社を立ち上げ、素晴らしい女性と恋に落ち、結婚した。ピクサーは世界初の長編アニメ映画、トイストーリーを製作するまでになり、今では世界一のアニメーション制作会社だ。その上、アップルがネクストを買収して、ぼくはなんとアップルに戻るようになった。ネク

ストで開発された技術が、今のアップルの基盤を支えることになったのだ。そして、ぼくは妻ローリーンと幸せに暮らしている。

ぼくがアップルを首にならなかつたら、こういったことは起きなかつた。苦い薬だったけれど、ぼくには必要だった。人生には頭をガツンと殴られるようなことが起きる。でも、なんとかなると信じるんだ。ぼくはやっていることが好きだったから、前に進んでこられた。きみたちも好きなことを見つけてほしい。仕事でも恋愛でも同じだ。仕事は人生で大きな意味を持つので、誇れる仕事をしないと、人生にも満足できない。なによりも好きなことをすることだ。まだ見つけていなければ、探しつづけるんだ。妥協はいけない。好きなものに出会ったらピンとくる。好きなことなら、うまくできるようになる。人とのつながりもそうだ。時間をかけて育むんだ。探しつづけるんだ。妥協しないことだ。



写真9 シリコンバレー地区
シリコンバレー歴史協会 HP (二〇一三年
七月二十二日取得)
[http://www.siliconvalleyhistorical.org/
#about/c1enr](http://www.siliconvalleyhistorical.org/#about/c1enr)

三番目の話は死についてだ。

十七歳のときに出会った言葉がある。「毎日を人生最後の日であると思つて生きなさい。いつかは最後の日がくるのだから」。この言葉を胸に、それ以来三十三年間、毎朝鏡を見ては自問する。「今日が人生最後の日だとしても、これからやろうとしていることをやりたいのか」。ノーという答えが続くと、何かを変える必要があるとわかる。

自分が間もなく死ぬかもしれないと思えば、重大なことも決断しやすい。他人の期待とか自分のプライドとか、恥や失敗への恐れなどあらゆるものは、死を目前にすると消えてしまい、本当に大切なことだけが残るからだ。いつか死ぬとわかっているだけで、何かを失うことにこだわらなくて済む。あるのは素の自分だ。自分の心のままに行動していいんだ。

一年ほど前にぼくはガンと診断された。朝の七時半にスキャンをして、膵臓にはつきりと腫瘍がみとれた。膵臓が何なのか知りもしなかった。医者はこれは治らないガンで、余命は三ヶ月から六ヶ月だといった。身辺整理をするように勧められた。つまり、死の準備をしないといけないことだ。子供にこれから十年かかって教えようと思っていたことをたつた数ヶ月で教えなければならない。家族が困らないように準備をしておかなければならない。別れの言葉を言わなければならない。

一日中その診断が頭から離れなかった。夜になって生体検査を受けた。内視鏡を喉から胃と腸に通して膵臓の腫瘍から細胞を採取した。ぼくは麻酔で眠っていたが、妻が検査に立ち会っていた。そのとき細胞を顕微鏡で見ている医者たちがどよめいた。なんとそれはまれなガンで、手術を受ければ治るものだった。そうしてぼくは助かったのだ。

このときほど死が身近だったことはない。あと数十年は、死から遠ざかっていたい。この体験をするまでは、たとえ死が必ず訪れるものだとしても、自分が死ぬことを考えたことはなかった。

だれも死にたくはない。天国へ行きたいと思っても、そのために死にたいとは思わない。それでもなお人はいつか死ぬ。免れることはできない。そうあるべきなんだ。死は生命をつないでいく上で必要不可欠だ。古いものを消し去り、新しいものを迎え入れる。今はきみたちが新しい。でも、やがてはきみたちが古くなり、消し去られる。あからさまな言い方で申し訳ないけれど、本当のことだ。

きみたちの時間は限られている。他人が望むように生きて時間を無駄にはしてはいけない。社会通念にはまってはならない。他人の期待に応じようとするだけの人生ではだめだ。他人の意見という雑音に自分の内なる声をかき消されないようにしましょう。最も大切なことは、なりたいたい自分になるために勇気をもって自分の心と直感に従うことだ。あとはどうとでもなる。

多くの若いときに、ホール・アース・カタログという素晴らしい雑誌があった（写真10）。その頃の若者のバイブルだった。ここからそう遠くないメンロー・パークでスチュアート・ブランドという人が発行していた。それは詩心に満ちあふれていた。一九六〇年代の後半だったので、まだパソコンやデジタル印刷もなく、タイプライターとはさみとポラロイドカメラだけで編集されていた。今でいうとペーパーバック版のグーグルのようなものだ。理想を掲げ、センスのよい品物や刺激的な思想が満載だった。

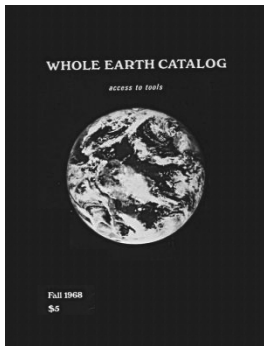


写真10 一九六八年のホールアースカタログの表紙
(二〇一三年七月二十二日取得)
<http://www.wholeearth.com/issue/1090/>

ホール・アース・カタログは何号か発行されたのち、最終号を迎えた。七〇年代半ばでほくはきみたちの年齢だった。最終号の裏表紙には早朝の田舎道の写真が掲載されていた。冒険好きな若者がヒッチハイクをしていそうな場所だ。その下にこんな言葉があった。「ハングリーであれ。愚かであれ」。最終号にあたっての読者へのメッセージだ。ハングリーであれ。愚かであれ。ほくは常にそうありたいと願ってきた。そして今、卒業して新たに歩みはじめるきみたちにもそうあって欲しいと願う。

ハングリーであれ。愚かであれ。

ありがとう。

注釈

- * 1 ウォルター・アイザックソン、井口耕一訳 『ステイープ・ジョブズⅠ、Ⅱ』 講談社、二〇一一年
- * 2 Alarabia The life and times of Steve Jobs' Syrian father, Sunday, 09 October 2011 <http://www.alarabiya.net/articles/2011/10/09/170940.html> (二〇一三年七月二十二日取得)
- * 3 ジョニ・ミッチェル公式サイト <http://jonimichell.com/music/> (二〇一三年七月二十二日取得)
- * 4 NHK・BS ドキュメンタリーWAVE 『ステイープ・ジョブズの子どもたち〜ハングリーであれ 愚かであれ〜』二〇一二年一月七日放送

参考文献

- アラン・デウッチマン (大谷和利訳) 『ステイティブ・ジョブズの再臨 世界を求めた男の失脚、挫折、そして復活』The Second Coming of Steve Jobs by Alan Deutschman translated by Kazutoshi Orai. 毎日コミュニケーションズ、二〇〇一年
- 上野陽子 『ステイティブ・ジョブズに学ぶ英語プレゼンテーション聞き手の心をつかむストーリーと五十表現』日経BPP社、二〇一二年
- NHKスペシャル取材班 『Steve Jobs Special ジョブズと十一人の証言』講談社、二〇一二年
- 大谷和利 『iPODをつくった男 ステイティブ・ジョブズの現場介入型ビジネス』アスキー新書、二〇〇八年
- 大谷和利 『ステイティブ・ジョブズ 人生から学んだ三つのストーリー』『MAC POWER』二〇〇九年第一号 二二二、一三三ページ
- カーマイン・ガロ (井口耕一訳) 『ステイティブ・ジョブズ 驚異のプレゼン 人々を惹きつける一八の法則』日経BPPマーケティング、二〇一〇年
- ティンケ、二〇一〇年
- 桑原晃弥 『ステイティブ・ジョブズ全発言』PHPビジネス新書、二〇〇六年
- 桑原晃弥 『ステイティブ・ジョブズ全発言 世界を動かした一四二の言葉』PHPビジネス新書、二〇一一年
- 『週刊アエラ』(二〇〇五年九月十九日号) 『ジョブズ氏の「わが人生」スピーチ 愛せるものを見つけよう』Stay Hungry, Stay Foolish』二十、二十一ページ
- CNN English Express 編 『ステイティブ・ジョブズ伝説のスピーチ&プレゼン』朝日出版社、二〇一二年
- ジェフリー・S・ヤング、ウィリアム・L・サイモン (井口耕一訳) 『ステイティブ・ジョブズ偶像復活』、東洋経済新報社、二〇〇五年
- 竹内一正 『ステイティブ・ジョブズ 危機を突破する力』朝日新聞出版社、二〇一〇年
- 竹内一正 『ステイティブ・ジョブズ 超仕事力』日本実業出版社、二〇〇九年
- 日本経済新聞サイト 『ハンクグリーであれ。愚か者であれ』二〇一一年十月九日、<http://www.nikkei.com/article/DGXZ035455660Y1A001C100000/> (二〇一三年七月三十日取得)
- 林信行 『ジョブズは何も発明せずにしてを生み出した』青春出版社、二〇一二年
- 林信行 『ステイティブ・ジョブズ 偉大なるクリエイティブ・ディレクターの軌跡』株式会社アスキー、二〇〇八年